



長年の反対運動を経て 新環境クリーンセンター稼働

市民と知識・体験の共有を

富士市のごみを考える会事務局長・環境カウンセラー

小野 由美子



市民の憩いの場に

静岡県富士市の新環境クリーンセ

ンターが2020年10月オープンした。併設の余熱利用施設「ふじかくやの湯」には、コロナ禍にもかかわらずオープンから1年足らずで5万人の来場者を数えた。

一番うれしいのは、反対していた地域の人たちが、親子連れで遊んで、お風呂に入り、食事をするのを目にすることだ。なぜこのように人気の場所になったのだろうか。

理由はいろいろあるだろうが、一つには、野外啓発ゾーンには遊び場や遊具・ピクトープがあり、通学路の整備やバス路線の新設など周辺インフラが整備されたことから、近くに若い家族連れが移り住んできているのだ。

また、ごみ焼却炉で高効率発電をし、併設の循環啓発棟「ふじかくや

の湯」と環境学習施設「ふじさんエコトピア」の電力をすべて賄っていること、約100畳の大広間と個室を備えたふじかくやの湯が市の福祉避難所に指定され、災害時には、福祉避難所として使用するだけでなく、一般市民にも風呂・水・電力を供給できる一大防災拠点となっていることが挙げられる。

環境アセスメント事後調査で、排ガス中のダイオキシン類濃度が、前施設の1000分の1と報告されたことも安心の要因となっている。

15年間以上の強い反対運動

振り返ると、2001年に、市は新しいごみ処理施設建設候補地を指定し新聞報道を行った。そこで初め



新環境クリーンセンター工場棟と芝桜



ごみマイスターと信栄製紙がコラボしたオープニングイベント。その他の紙古紙を持参した市民にトイレトペーパーが提供された



オープニングセレモニーのようす

て知った近隣地域から猛烈な反対運動が起きた。

とにかく「ごみ処理施設建設反対」「ごみはよそへ行け」「ダイオキシンで人が死ぬ」それらの看板があちらこちらに立ち、自家用車にもステッカーが貼られ、地域挙げての反対運動となった。地域に結成された「ごみ処理施設建設反対委員会」は、市から説明を受けることを拒否、「ごみ処理施設建設反対」に同調することが住民の証とされた。

当時、燃やすごみの総量は記録史上最大となり、人口の増加も予測される中で、市の当初計画では既存の焼却炉よりも大きな規模の焼却炉を建設する予定だった。

私たちにとつての始まり

その渦中において、私は、ごみの総量が最大のままで、建設場所の反対運動だけでよいのか悩み、地元富士常葉大学で「ごみ問題専門の松田美夜子教授に相談した。

「市民の力でまずごみを減らしましょうよ。」と松田教授から明確な回答がきた。私は、先生の講義を受講し、2003年に「富士市のごみを考える会」(以下、ごみを考える会)を発足、松田先生を講師に「ごみはともだち」と題して第1回目の

講演会を開催し、多くの市民が来場した。

次に、富士市廃棄物対策課統括主幹を講師に「これからのごみ行政」と題した勉強会を行った。この時に、市全域にごみマイスター制度を確立することと、市民といっしょにごみ減量を行う提案が出され、私は第一期ごみマイスターとなった。

2004年には「第18回牛乳パックの再利用を考える全国大会」が富士市で行われた。ごみを考える会は、松田先生をアドバイザーに迎え、「生ごみを宝に」をテーマに講座を設けた。このイベントは、地元紙に大きく掲載され、市民にごみ減量への機運が生まれた。

2008年、ごみを考える会は、当時の鈴木市長に「プラスチック容器包装の分別回収」「ごみ袋の有料化と指定ごみ袋の導入」を提案し、富士市は翌年度より、プラスチック容器包装の分別回収と指定ごみ袋の導入を始めた。私たちごみマイスターとごみを考える会は、新しいごみ分別の説明会を何十回となく開催し、ごみ置き場での分別指導にも奔走した。

翌年9月には、ごみ減量が進んで

きていることを受けて、市は地区反対委員会説明会で、焼却炉の規模を既存施設よりも50t小さい1日当たり250tとすることを発表した。

市民と行政がともに学ぶ、視察

それでも、ごみ処理施設建設反対運動は、激烈さを増していった。「ごみ処理施設は爆発する」「ダイオキシンで近隣住民は苦しむ」と言った文書が地区に回覧され、地域の会合などで流布され続けていた。

市の説明会は100回以上に及んだが、市の説明はなかなか受け入れられるものではなかった。反対住民が懸念を抱く内容が市の説明では払拭できないため、私たちは、新しいごみ処理施設とはどのようなものか実際に見てみたいとわからないとの立場で、ごみ焼却炉の視察を市と地区反対委員会双方に提案した。市主催の視察5カ所、地区反対委員会主催2カ所、ごみを考える会主催や個人的にリサイクル施設を含め15カ所以上の視察を納得がいくまで繰り返した。

地域住民と市職員は、バスの中で他愛のない話をし、視察先でも説明を聞き、学び、質問をし、視察

報告を互いに議論し作成した。そこで市民と行政がともに知識と体験を共有したことが、その後の相互理解に非常に役に立ったと、いまでは感じて



ふじがくやの湯。⑥は大広間。焼却時の余熱を活用した入浴施設として、NHKでも紹介された

知識と体験の共有は話し合いの土台づくり

そのような中、一部反対住民は市が説明する数字の正当性を疑い、地区反対委員会の方針に反対との立場で、町内組2つが脱会、焼却炉建設反対を強く訴えた。私たちは、市が出してくる安全だという数字が本当



専門家による一連の勉強会を通じて、反対住民と市が知識を共有しながら、話し合いの土台づくりを行っていった。2009年には、環境省廃棄物対策課(当時)から技官(作花晋朗氏)を講師に招いた

なのか信用できるのか知るために、地区反対委員会主催で専門家を招き、科学的な裏付けのある数字を皆で勉強する提案をした。

2009年に(一財)日本環境衛生センター^{※1}、次いで、環境省廃棄物対策課の技師の方々を講師に勉強会を行い、市提出の数字の根拠が理解できた。2010年、(公社)

全国都市清掃会議技術顧問の講師の先生^{※2}を招き、講演の中で「ストーカー+灰溶融炉」の方式に「ストーカー+外部施設資源化」を選択肢に入れる提案がなされた。

同年、富士市と地区反対委員会は環境アセスメントを受け入れる調印を行った。

しかし、「環境アセスメントなど知らん」と反対が出たことから、地区反対委員会主催で環境アセスメントの研究者^{※3}を招いて勉強会を開催した。勉強会には、地域住民が多数参加し、片谷教授からは専門書を寄贈され、皆で学びを深めた。それ

らの学びが、その後の施設整備の意見交換の中で生かされていく。

一連の勉強会には、市民だけでなく、担当課の市職員も、現場を預かる環境クリーンセンター職員も自主的に参加していた。

紆余曲折を経ながら3百数十回に及んだ市の説明会は、勉強会后、双方の知識の土台づくりができたことで、安全安心な施設について建設的な意見交換ができるようになった。

市民の学びと

お互いの信頼関係が 一番の解決策

市から突然、ごみ処理施設の建設予定地に選定されれば、近隣住民が不安を感じ安全なのか心配するのは自然だろう。自分たちが毎日出すごみはどこから来てどこに行くのか、知らないで生活している市民は結構多い。市民に向けて普段からごみ行政に関する働きかけをすることや、

ともに問題を解決する仲間意識・信頼関係はとても大切だ。誰でも、知らないこと、未知のことには不安や怒りが沸いてくる。高飛車に押しつけられればなおさらのことだ。

日ごろから、一般市民向けに、環



桜美林大学・片谷教授のゼミ生がクリーンセンターを見学

富士市新環境クリーンセンターに、できれば富士山が見える日に見学に来ませんか。日本一の富士山がお出迎えします。 **W**

【注】

※3※2※1
藤吉秀昭氏
寺島均氏
片谷孝氏

【編集部レポート】

市民に末永く愛される施設に

静岡県富士市

富士市新環境クリーンセンターは、工場棟、資源回収棟、循環啓発棟から構成される。核となる焼却施設には、1日当たり250 t (125 t /24h×2.炉) の処理能力を持つ連続運転式ストーカ炉を採用しており、ごみから回収した熱エネルギーを、出力6800kWの蒸気タービンに使用して発電し、施設内の所要電力と売電に活用する一方、循環啓発棟の余熱利用体験施設「ふじかぐやの湯」に給湯熱源を供給している。資源回収棟は、市民から持ち込まれたごみを直接受け入れる施設で、PETボトル、プラスチック製容器包装、缶類、衣類などを選別し、棟内のストックヤードに保管する役割を担っている。

2020年10月の稼働開始後、今年6月までの焼却施設の状況をみると、昨年4、5月に発電機が調整により停止した時期があったものの、焼却炉自体は順調に稼働している。2021年度は6万2800 tの焼却処理量に対して、発電量は2750万kW時だった。このうち、1970万kW時が売電に回っており、約2億8000万円の売電収入があった。市廃棄物対策課によると、施設内で消費される電力は総発電量の3割程度で、当初の想定と比べて少なく、逆に売電の割合が多くなっているという。2022年度は、4月から発電機もフル稼働しており、昨年度を大幅に上回る売電量となる見通しだ。

オープン当初にコロナ禍の影響で市民の利用が進まなかった循環啓発棟も、利用者が徐々に増え、2021年度は「ふじかぐやの湯」だけで来館者数が5.7万人に達した。2022年度は来館者が月間で7000人を超える月もあり、前年度を上回るペースだ。利用者が増えた背景には、循環啓発棟内の修理再生施設「ふじさんエコトピア」が、新型コロナウイルスワクチンの



予防接種会場として活用されたことで、結果的に施設の周知につながった面もあるようだ。また、住民との協定に基づき、市民が足を運びやすいように、市内のバスターミナルと、ふじかぐやの湯を結ぶ路線バスが運行しており、交通アクセスの利便性が図られていることもポイントとなっている。

「ふじさんエコトピア」の利用も活発だ。ピクトープ観察会や植樹のイベント、裂き織体験や着物リメイクの講座など、施設と市民団体の協働事業をはじめとしたさまざまな催しが行われており、中には裂き織体験講座のように昨年度40回開催され、キャンセル待ちになる講座もあるなど、好評を博している。

市廃棄物対策課の佐野琢哉課長は、「ここでは単にごみを焼却するだけではなく、さまざまな環境活動に利用したり、温浴を楽しんでいただくなど、市民が気軽に交流する場にもなります。地域の皆様と長い時間をかけて話し合いをしながらつくりあげた施設なので、末永く愛される存在を目指していきます」と抱負を語った。

(本誌・新倉)



富士市廃棄物対策課の佐野琢哉課長㊦と施設担当統括主幹の遠藤正徳氏㊧